

ぐるっと音楽紀行

旅するピアニスト

赤松林太郎

スペイン・アランフェス

♪ 17

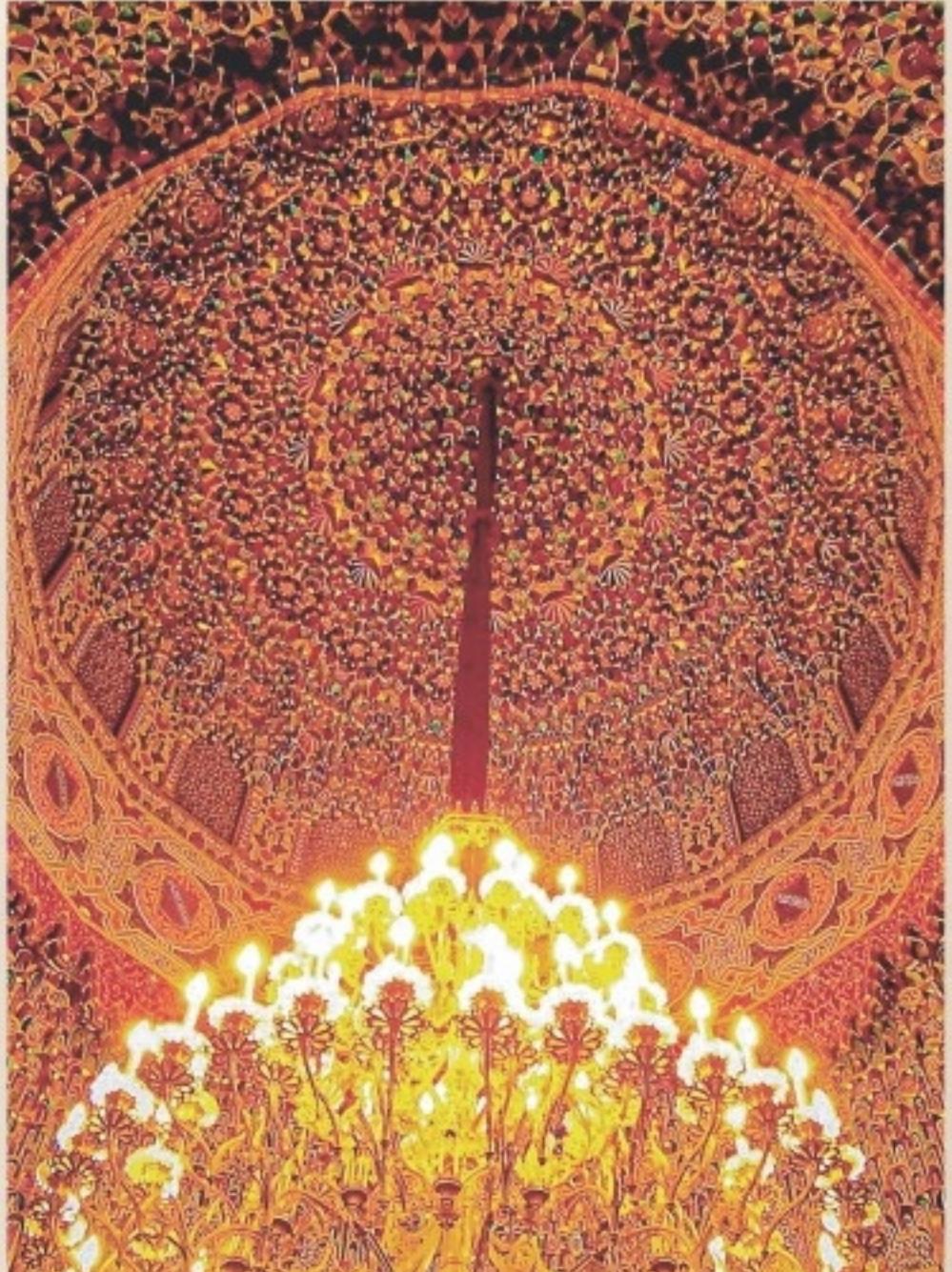


ヨーロッパでは春の季語がイチゴであるかのように、旬になると市場を真っ赤に染める。イチゴのシーズンが始まると、まずはモロッコ産やスペイン産が軒先に並び、まもなくイタリアやフランスのものが取ってかわる。店で使われるスコップは1杯で約1キロのイチゴがすぐえるらしく、パリに住んでいた頃はいつもどつさり買って帰った。

イチゴといえば、スペイン・マドリードの春を思い出す。初めてのマドリードは2003年4月下旬だった。その時にエントリーした国際ピアノコンクールは中堅クラスながら、名だたる強豪ぞろいで、始まる前からナーバスになっていた。夜も早くにホテルへ戻り、八百屋で買ったイチゴを夕食がわりにする日が続いた。日本のイチゴのような甘さではなく、酸味が程よく残る。時々あの酸っぱさがかしく感じられる。

次にマドリードを訪ねたのは06年の春。このコンクールが25周年

ギターの旋律に溢れる詩情



アランフェス宮殿の「アラブの間」=2006年4月、いずれもスペイン(赤松林太郎さん提供)

ヌエバ・アクリオポリス国際ピアノコンクールに出場した赤松林太郎さん(左)=2003年4月



あかまつ・りんたろう 1978年、大分県生まれ。2歳から神戸で育つ。兵庫高、神戸大発達科学部卒。パリ・エコール・ノルマル音楽院高等演奏家資格首席取得。2007年に帰国し、国内外で活動。大阪音楽大准教授、洗足学園音楽大客員教授。神戸市在住。



を迎えるということで、レセプションパーティーに招かれた。マドリード王立音楽院の教授たちから「リンタロウ、リンタロウ」と熱烈な抱擁を受け、パーティーでは歴代の優勝者をまとめたドキュメンタリーが放映された。

私が優勝した03年、第2位だったエンリケ・ベルナルド・デ・キエロス・マルチンは、この年の記念すべき優勝者となつた。03年の第3位受賞者バル・ダーヴィドもその後すばらしいピアニストになり、母国ハンガリーでリスト音

楽院の教授として活躍している。とりわけバルとの旧交は公私ともに今なお続いている。

この時のマドリード滞在では、アランフェスまで足を延ばした。高原に位置するアランフェスまでは電車で45分。スペイン国鉄が期間限定で運行する「イチゴ電車」(マドリードーアランフェス間)は観光の目玉になっている。アランフェスはなんといっても王宮と美しい数々の庭園で知られ、いたところで咲き乱れるアマポーラ(ひなげし)の花々が、王宮を彩

る朱色と調和する。

ホアキン・ロドリーゴがこの地をたたえて作曲したのが「アランフェス協奏曲」だが、よく親しまれている第2楽章の胸をかきむしるような悲しいギターの旋律は、彼の不遇な時代の記憶でもある。

ロドリーゴは3歳の時にジフテリア熱で視力を失つた。彼に寄り添い、彼の目となつたのが、パリ留学時代に知り合つたトルコ人ピアニストのビクトリア・カムヒだつた。スペインの詩人ヘラルド・デイエゴはロドリーゴを「音の景色の作り手」と評したが、彼の音楽が目による产物ではないからこそ、溢れんばかりの詩情が私たちの心に迫る。

アマポーラとロドリーゴの音楽はアランフェスのクライマツクへと向かう。離宮の「アラブの間」はアランフェスのクラシックス。王妃の喫煙のために作られた部屋はむせ返るような装飾が施され、幻想に満ちている。まだ見知らぬ世界は限りない。

◇次回は6月13日に掲載します。

